

# きょうと福祉情報部だより

2018年 4号

## お父さんと最後の時をすごす～娘の手記

父は、昨年11月29日、98歳7ヶ月。自宅で安らかに亡くなりました。

この間、介護度1から2、3、4と加齢とともに身体が不自由になってきましたが、介護の支援の方々など本人にとってよりよい日々が過ごせるよう一生懸命支援してください、本人にとっても家族にとっても大きな励みになりありがたかったと心から感謝しています。

私の主人は30年前、子供が2歳と4歳時に病死し、それから父は自転車で保育所に送迎したり、病気の見守り等々、成人するまで父親代わりとしてよくやつてくれました。

そのおかげで、私は子育てしながら40年余り安心して働き続けることが出来たのだとつくづく思います。これまでの感謝の気持ちを込め、今度は父の介護を最期まで精一杯しようと強く思い、父の「最期まで家で暮らしたい」

「口から食べられなくなっても胃ろうはいらん」と言っていた気持ちを大切にしたいと思いました。

ある日、誤嚥性肺炎で熱が高く入院。そして、体調が落ち着いた時、父の「家に帰りたい」の気持ちにそってケアマネージャーさんに24時間体制の支援計画を作成してもらい帰宅。

自宅に帰ると、まず「ラブ」(愛犬30キロ)と大きな声で呼び頭をなでると、父はとっても穏やかな表情になりました。

そして、病院では口から食べる事が出来なかったのに、ろみをつけたサイダーをスプーンであげると「もっと、もっと！」と言いながらおいしそうに飲んでいるにびっくりし喜びました。住み慣れた自宅で過ごせて良かったのでしょうね。本人の気持ちにできるだけ寄り添った介護、なかなか難しいですが、たとえ言葉がなくても、表情や仕草から感じることが大事なことをあらためて思いました。

介護をしていて嬉しかったことは、よく慣れたヘルパーさんが父をポータブルトイレに移動時、父は「娘にしてもらう」と拒否。ヘルパーさんは悪いことをしましたが私を信頼してくれている父の気持ちを嬉しく思ったあの日のことでした。

これからは、障がい者施設に入所している妹や14歳になる愛犬「ラブ」を最期まで見守りたいと思います。

そのためには、私自身が健康でなければなりません。前向きに社会的に何かをし続けるために自宅を解放し「居場所づくり」ができたらと考えています。なまえは決まっています。「光子のへや」です。楽しみです。

みなさんありがとうございました。

2018.3.22 濑川 光子